

## 編集後記

同窓会誌第4号をお届けします。8月が近づくと、今年も会誌をちゃんと発行できるのか不安な日々を過ごしています。それに加えて今年はCOVID-19の感染拡大があり、生活のスタイルの変更を迫られた厳しい年でした。そんな中でもなんとか同窓会誌を発行することができ、ほっとしております。

この感染騒ぎより前に、ジャレッド・ダイヤモンドの「銃・病原菌・鉄」という本を読んでいた。一時話題になった本で、ベストセラーにもなりました。それを昨年遅ればせながら読んでみたのです。何故ヨーロッパで文明が進んだのか、ということがテーマとなっています。南北アメリカの新大陸より、ヨーロッパが優位であったことの原因を検証しています。ヨーロッパの国々によって新大陸のインカやマヤの文明は滅ぼされてしまいました。何故逆のことは起こらなかったのか。インカ帝国がヨーロッパに攻め込んで支配する、というようなことは起こりえなかったのか。それに答えるキーワードとして「銃・病原菌・鉄」が選ばれているわけです。銃は武器の優位性、鉄は高度の文明を象徴しているのですが、病原菌というものが入っているのが不可解でした。三つ並べると、どうも病原菌というもののすわりが悪いように感じられたのです。しかしながら、この病原菌というものが新大陸の人々に大きな打撃を与えたそうです。戦闘で殺戮された人間の数より、病原菌で死亡した人間の方が多い。ときにはある部族の人々を壊滅させてしまったこともあるそうです。ヨーロッパ人は免疫を持っているが、免疫を持たない新大陸の人間は感染してたちどころに死に瀕する。それほど恐ろしさを持ったものであることを、ダイヤモンドはその著の中で述べているわけですが、その恐ろしさというものが、読んだ当時はどうもピンとこなかったのです。そして今回のCOVID-19。この事態を目の当たりにして、いかに感染症というものが恐ろしいものであるか身に染みて理解できました。知らないでいられた方が、よほど幸せなことだったと今更ながらに感じます。

さて、そんな中でも皆様からは沢山の記事が寄せられました。今回の事態でいろいろな困難な状況だった人もおられます。文章の中でそのことに触れられているものもあります。このような状況にもかかわらず、皆さんから記事をお寄せいただいたことに厚く感謝いたします。

今は人との間に距離を取ることが求められています。それを新しい生活スタイルとして受け入れていかざるを得ない状況です。論語の中に

子曰く、晏平仲、善く人と交わる。久しくして之を敬す。

という一節があります。晏子が今の世相を見たならば、かくも生き難い世の中になったものかと嘆息するやもしれません。この同窓会誌が、わずかでも人と人との距離を縮めてくれるものであることを願います。

(編集長 重川 一郎)